泉浩郎詩集

大地の展望

大地舍版

詩集

大地の展望

泉浩郎著

東京 大地舎

S, 3, 10

泉浩郎著

詩集

大地の展望

大地舎版

泉浩郎
詩集
大地の展望
大地舎

泉　浩　郎詩集

大地の展望

東京　大地舍版

泉　浩　郎詩集

大地の展望

東京　大地舎版

目次

序詩

大地の航海……（一三）

第一編

冬枯れの山……（一三）
古くなつたセンチメンタル……（一八）
亡き戰友と語る……（二一）
幻想の美女……（二七）
筑波小曲……（二九）
筑波抒春……（四一）

麓の春……（四三）
夏の祭り……（四五）
村の雨乞ひ……（四九）
山の風景……（五一）
曠野の花……（五三）
純情の花に寄する詩……（五五）
月小曲……（五七）
杜鵑……（五八）
魚釣り……（六〇）
氏神様……（六二）
銀杏……（六四）
麓の娘……（六六）

盂蘭盆……（六七）
七夕祭……（六八）
古墳のほとり……（七〇）
秋……（七二）
百舌鳥……（七三）
暴風雨……（七四）
蟋蟀……（七六）
松蟲……（七八）

第二編

死の春に寄する詩……（八一）
春の花によする詩……（八三）

寒村……（八六）
春はまだか……（八七）
崇嚴……（八九）
光りばかり……（九一）
野原は枯芝……（九二）
雜木林……（九三）
村落……（九四）
村相……（九五）
折に觸れては……（九六）
村童……（九七）
寒村風景……（九八）
嬰兒……（一〇〇）

燃燒……（一〇一）
蟷螂……（一〇四）
蛙……（一〇五）
土地……（一〇六）

第三編

哀傷詩篇……（一一一）
阿見原の詩……（一一〇）
耕人の詩……（一一〇）
村落の舞臺……（一一七）
田舍の風景……（一一〇）
亡き詩友を憶ふ……（一一四）

泉君への言葉……福田正夫（一）
序……白鳥省吾（四）
著者の序……泉浩郎（七）
『大地の展望』のために……多田不二（一四九）

——目次了——

泉君への言葉

筑波は僕にとつてさびしいところだ。あの峯々の持つてゐる魂は、なんといふ深さで迫つて來るだらう。そしてそれを考へれば考へるほど、泉浩郎の風貌が、しつかりとした大地の風格を持つて、僕の感情の中に紛ぎれ込んで來るのだ。

僕は筑波根の谷間の幻をすてたい。

が、そこに泉君だけは、すてられない現實として在る。

しかも詩人として、土に生きる人間として、泉君ほどがつしりしてゐて、しかも純情の寂しさを持つ者があるだらうか。——孤獨の影を曠野の中に投げる巨木のやうに、伸びやうとして風に慄

え、靜まらうとして魂の飛躍に苦しみ、和がうとして寂寥の中に悶えてゐる。

そこに生きる者は、やはり筑波根に生れた魂だ。

曠野の果てにそびえてゐる意志だ。

僕は泉君に對して、熱情を捧げる者ではないが、この筑波根の持つてゐる風貌と、迫つて來る力と、つつこんでくる魂とには、心を動かさずにはゐられないのだ。そしてここにこそ、泉君の詩魂へ呼びかける僕の言葉があり、そしてその詩集に對して贐ける感情があるのだ。

僕は君が踏みしめてゐる大地を知るのだ。

伸びようとする君は？——僕はそこまでは言ふまい。それはこの詩集一卷が、明かに示してゐると思ふからである。

一九二八・八・一七・筑塚のほとりにて

福田正夫

序

泉浩郎君の郷里、常陸國眞壁郡紫尾村は、筑波山の裾にある。紫尾村の名は、「紫」の筑波の「尾」から來た由である。

常陸は吾國の文化の最も古い處であり、わけて筑波は富士と東西相呼應して日本の代表的な靈山と言はれてゐる。常陸に生れて筑波を望んで育つた藝術家はあつても、泉君の如く、眞に筑波の根に育つた人は稀である。

今夏、泉君の郷里を訪ねて、田の畦に立てられた七夕の竹や、村の人々の共同の田を周圍に持つてゐる大同松といふ大同年間からの老松や、筑波の裾の幽寂な松林や、稲の花の香のする一望の

豐穣な青田を眺めて、いかにも農村らしい傳統と展望とを感じたそして其處に育つた泉君の魂、泉君が作るところの詩を一層よく理解し得た。

泉君の第二詩集『大地の展望』は、その第一詩集『曠野の彼方を行く者』から引き續いて、終始、農村的であり、郷土的であるところのものである。そしてその貫ぬいてゐる精神には常に新しい時代がある。即ち新しい思想感情を新しい韻律で歌つてゐる。その點に於て泉君は常陸に於ては何人も末だ開拓しなかつた新しい領域を切りひらいてゐると共に、よい意味での代表的な郷土詩人、農村詩人である。

殊に泉君の生活は、農村に於ける一家の主人として常に生きた現實に接觸し、日常の實際に就いて責任ある立場にあるので、そ

の思想も卓上の空論に馳することなく、穩健中庸を得てゐる。從つてその詩は農村の誰しも朗誦して快適と共鳴を感じ得るであらう。蓋し農村の先驅者として代言人として選ばれたる詩人といふべきである。そしてその思想は溢れるばかりの抒情味のなかに一貫してゐるのは、詩情の豐かさと若さの脉搏を感じさせ、軟かい感激のなかに人を魅惑してゆく力がある。

私は吾が詩壇に於て、斯かる堅實な路を歩るいてゐる詩人を見出でたことを祝福し、その第二詩集の光彩が、詩壇に一道の明るさを投ずるものであることを信ずる。

昭和三年九月

東京市外雜司ヶ谷龜原にて

白鳥省吾

著者の序

嘗て生誕したわたしの處女詩集たる、曠野の彼方を行く者、の出版は當惑したことに誤植の多いことだつた、そして震災直後の企圖だつたので其の直前詩稿の紛逸は更にわたしの意想を沮喪させた、其の上に誤植にも惱まされた。本當にわたしの嘗ての詩集は一頁の活字から詩集の完成まで人手によつて蒼惶の間になされたに係らず兎に角わたしは詩壇への貧しい進出を試みたあの時に今茲にわたしの回顧の念や遡つて深く留意し深く感謝したいことは前述の誤植のあつた詩集に於てさへも讀者はよくそれを許容し讀者はよくわたしの詩境をとらへわたしの詩人たる批判を眞實を

致し正當に加へてくれたことである。

遠き日或者はわたしに貴重なる强靱な鞭を當て、過去の日或者は溫き詩情の交りを昂進せしめて正當に加へた、今わたしは感激の果てに落つる涙無きを得ない。

わたしはあの頃時機も時機豫期しない批評を各處各方面から加へられた批難や贊意を玆に述べる其の理を見ない。詩人は須らく此等の矢面にたつことが現今日本詩壇の總意を反映する常態だからである、其處に前進と開拓とがある。

だが貧しいわたしは其後續いてわたしの詩作生活に熄むことを知らない、そして其後も勿論わたしには變遷が來た、進歩も來たある時の哀憐、ある時の欣快、皆詩に於て味ひそして慰め盡されて來た。わたしは詩壇を想察するとき何時も勇健になり度い、此

の稚氣から數年を過ぎてわたしは今わたしの出版を新しくすべき機會が至つて此の詩集を世に送り出すに就てわたしがただひとつ會心に感ずることは日本詩壇の畏敬措かざるわたしの知己たる諸友から蒙る平素の鞭韃と厚誼とに報いることの出來得る點今回の詩集に僅かにさへもありとするなればわたしの望外これに如くものはない。

更に希くは寛容な諸友がわたしの空しい此の詩集を世に送るに就ての叱非を深く咎め無くんば幸の喜びである。新進詩人社の諸友、帆船社の諸友、地上樂園の同人、併せて舊日本詩話會の諸友皆然りである。

此の詩集を編纂するに至つた年表から言ふと大正十三年春に前述の詩集、曠野の彼方を行く者、を出版し此の地方に於て地方詩

壇の興隆を意圖し次に小册子を刊行した以後の時日を顧てわたしはいかにわたしの貧しい勞苦に努力し、いかに寂しい戰ひを戰つてきたかを考へる、畢竟わたしは謙虚な精神から澤山の詩稿を自ら掣誅し反故にした、けれども反故にして足らざるも此の詩集を出すに當つて第一編第二編第三編に分別した、これは嚴密に言ひ兼ねるが幾分づつの詩風と其の内包との折折に生ずる向傾移推を漫然と分けたに過ぎぬ。

此の詩集は諸友の前に置く貧しい捧げものとならう。

殊に此のわたしの出版の意圖に賛意と祝福とを表し下され快く序文跋文を寄與されわたしのために佳き言葉を贈る白鳥省吾、福田正夫、多田不二の諸兄に謝意を捧げ、更にわたしに從來指導を賜りたる福士幸次郎、正富汪洋、伊福部隆輝の諸兄に此の機會に

謝意を捧げ、尚更に都市から歸つて此處幾年月地に生き吾が幼い誕生の地たる寒村の山河に謝意を捧ぐ。更に更にわれを精進せしめよ。

昭和戊辰新秋常陸筑波北麓

泉　浩　郎

序詩

序　一

わたしの帆船は出發した
平原の綠に育つた處女や
大地の愛にめぐまれた鄉土人や
寂寥な農夫や
勇健なる青年の思想やを滿載して
わたしの帆船は
地方的な波止場から未墾地の深洋へ出發した。

序　二

鄉黨よ　山河よ　鄉關よ

いまは可弱げなる船長に頼母しげなる瞳を開いてくれ
ああ　熱涙と眞劍に燃えてやまないわたしは本當に
行路の不安から昨日の衣だつた虚飾や浮薄を
ぬぎ捨ててしまつて赤裸になつた。

序　三

夕に水田から星を仰ぐ農夫よ
それから　はるかなる彼岸をみつめて
勞働に涙ぐみつつ送る鄕土の青年よ
わたしのために元氣にみちた情熱の旗を振れ
あの曠野を展望して彼方に行く
小さげなる帆船に祝福を　おくれ

序　四

海洋線の彼方をみつめてわたしは行く
おうお　山河よ　鄕土よ
もし未墾地に行きつかず海洋に溺れたなら
わたしは永遠にねむるであらう
鄕土のあの青い山にわたしの死骸を埋めてくれ
ああ　みづからの帆船をして祈らしめよ
いまから彼岸に着く刹那の歡喜は
さびしげに　たかまり起きる。

序　五

見知れられざる郷土の海洋の彼方にある青い希望よ
ああ　永遠なる希望は涙ぐめる山河に生きるぞ
ほほゑめる曠野の處女地に生きるぞ
ああ可弱げなるわたしの難航海を見まもる
平原の緑よ
寂寥の農夫よ
いまわたしのまづしげなる帆船にいのる
更に更に祈るであらう。

詩集

大地の展望

泉　浩　郎著

第一篇

冬枯れの山

山だつだし　古ぼけた洋服をきて
支那煙草をふかしてゐた　わたしは
すぐ　死　を考へてしまつた、
……鐵砲を持つてゐるからです……
夕暮れなので　ほんとに寂しくて
大きな　わけのわからない　大きな
森　林　ばかしつづいてゐるなかに　たたづむと
二つの鷹がひくく空をとんでかへるのです。

わたしの存在を　ちつとも認識してゐないらしく
ほんとに仲のよい美しさなんです。
そして　どことなく暢氣にみちた聲で。
　ピキロ　ピキロ……
こんなふうに啼く聲が強い響きを持つてました
山には　誰もゐないし、
これからが　わたしと鷹のたつた二つきりの
じつに寂しい山の夕暮れです。
……こんなとき　わたしが鐵砲打つたら
びつくりするに　きまつてます。
びつくりするばかりでなしに
いづれかは死んでしまふ。

不幸なら　みんな　死なねばならない。
わたしは　彼等の生存に恐怖も死滅も
心から　ゆるす氣になつた、
彼等は　冬さびた山の景觀であつて
彼等の鄕土もこのひろい山なんです。

髮の毛を長くのばして、
黑い長靴をはいてゐる、
山賊のやうな人たちも見るでせう……
……彼等は冬ぢゆうの日
青い空の永遠を思慕し、

また　忍耐づよく　幸福をもとめてゐます、
　ピキロ　ピキロ　と勇しく啼く
それは　冬の大空への戀である、
彼等の　やむにやまれぬ奮闘の大地である、
……だからわたしは鷹の生活に
損害をあたへたくないのです。

……どうですね……
久し振りで冬枯れの山を　うたひたいと
わたしに鐵砲かつがして誘つた、
耳かくしの娘さん！
……いいですか……

尊敬すべき　親友ぢやありませんか、
……わたしの心は明るい……
山はくらくなるばかり……
お寒くない？
……かなたに　かなたに淺間の煙りが見えますよ……
それだのに　少女の瞳は涙に濡れてゐました。

古くなつたセンチメンタル

わたしの遠い地平の果て
ちいさな生活の過去よ……
それは現在の心にまでも完全に連絡してゐる
荷厄介な過去を捨ててしまつて　いいんだけれど
追放もできずに藏つておかれる
ずゐぶん　古くなつた　センチメンタル。
わたしはいま　ふと洋服を着だして
さびしい野路をあるいてます……

外套の　かくし　には
出しおくれた手紙が入れてありました、
いまは忘れかけた人の心臓に投函することを止めて
大切に懐中する外ない古くなつた　センチメンタルよ。

わたしの　いたんだ心象に　忘れかけた人の
悲しい心情が漲り溢れ
したたりやまぬ思ひ出。

出しおくれた手紙の心よ、
誰もゆかない青春の暗室よ、
路傍に住む　むなしい感情よ……

曠野を　ひとりゆく
わたしの胸は熱く搏たれます。

亡き戰友と語る

山も青いぞ！　高原も青いぞ！
ただひとつわたしの行く路傍にある
物語りふかい小さな墓よ
墓石は鬱憂の苔蒸して緑りの樹蔭は
かなしき靈を　なぐさむる
永遠にねむる　あはれ戰友の碑よ！
ああ　戰友よ！
わたしが健在である驚異を
地下にある君の靈は　さびしく歌はないか。

傷を負つて間もなく
今は郷土に埋れて一介の墓石となる、
ああ　君の遺族は　ひよわいながら
炎天の田圃で汗ぐむで働いてをるよ
ああ　平野には一滴の雨も降らず日照りつづきだ、
君の子供が　ぐんぐんのびて
君のわかい妻君が年とるばかりだが
それがなんで幸福か。

ねえ君よ　彼の出征中ただひとつの感激を
君はいまだ　わすれないであらう、

兵隊の武装解除の日　君はどうしても
敵の若い青年士官の生命を
散らすことを欲しなかつた　然うだ！
蕩漾たる黒龍大河のほとり蒲公英咲きみだるる
草原の大地に　流れる紅の血潮が
人類愛の赤いまぼろしとなつたか、
暗憺たる戰地ではツルゲエネフの言葉さへ
話題にのぼることがどんなに慰められたであらう

血腥くなつた軍裝にあつても
君の話は　わたしを泣かしたぢやないか
休戰の時　ドストエフスキーを知つてをる、

敵兵と語らひて君は涙ながらに握手して
おなじい武斷の日に邂逅ふたなげきをくりかへしては
明日の戰鬪をさびしくおもひながら
別れたといふではありませんか、
ああ　その時とほい千古の壁畫をまわしたやうな
雪皚皚のスタノボイの秀麗な脈嶺を
いかに印象ふかく眺めたであらう。

ね君　ただひとつのさびしい悲劇も
決して忘れないであらう、
莫迦莫迦しいと恨むやうに君は泣き出したね
ああ　然うだつた

その時わたしは武裝して討伐に向つた戰友を顧みて
悲痛な聲をかけたのです、
……君は一體　誰が憎くてさう一生懸命になつて
時にはのべつづきにボツンボツン鐵砲の彈を
飛ばしてをるのかと、突然訊い時
さしもの勇健な戰友も　わつと泣いてしまつた
そして二人は哨舍近くの墓に
ああ　身の寒氣に耐へかねてゐる夕空の日に
十字架ない慘劇の墓に敬禮したぢやないか

ああいまは永遠に死屍になれるわたしの戰友よ
いま鄕土にねむれる一人の勇健な青年よ、

殘虐は鄉土平原に育くまれた
青年を愛する彼の鄉土から奪つて
名もない野に
はかなくも露と消えさせた
ああ　この物語りふかい小さな墓よ。

幻想の美女

さすらひの果てよ、
谷間に咲く　山百合の幻想を慕つて
空間を　ちらちらと翔けた
美女の　いたましさよ、
深山のなかに心臓は燃えて
紅い青春の黑い幕よ、

たそがれの谷間に
はかなく消えた魂の

悲しき玩具をはこび行く
つれない麓の火葬場よ、

秋のこほろぎは夜つぴて叢に啼いてゐた
星は灰色にまばたいて
樹木は黄色い煙りに　なびいてゐた、
其處で一つの人生を久遠に祈ることにしたのです。

筑波小曲

つくばねの　千願つつじ
こひせよ　と
眞赤に　眞赤に　咲き燃ゆるゆふべ
女のひとよ、
つくばねは太古より
詩の峯　歌のみね　こひのみねよ
世々は　かはり
いま夕暮れは　暗く重く
曠野に陽はおちるよ

オルガンをひきなさい　女のひとよ。

筑波抒春

しづかなれども　つくばおろしのおと
われらがこころ　かなしきまでにうつ
けふもつもるやまの靈。

けふもつもる春の靈
かすかにも　うれえにけぶる
山　炭燒きのむすめゆゑ
ひとりの山ではあるけれど　男體（なんたい）　女體（にょたい）は春のゆめ
とけてながるる男女川（みなのがは）。

はくきんの指環なれば　都に得らるべし
われらのうしなへるもの　いづくにもとむべき。

われらおのづから　なみだあふれて
しづかなれども　つくばおろしのおと
われらがこころ　かなしきまでにうつ。

いまふたつのこころ相擁して筑波野に泣けり。

蘆の春

おうお　ほんとにまだ寒い冬の夜の驚きよ
……キロコロ　キロコロ　キロコロ……
こんな風な響きをもつてゐます、
生きてをるんだとほんとうに強く意識でもしてゐるやうに啼きだ
した田の蛙です、
わたしの知らない何時の間にか冬から目覺めた土の中の蛙です。
つひ田の面は氷に張りつめられ　隙間もなく
とざされた冬の地面に
わづかばかり暖かさうな陽射しがやつてきたのか

わたしは　それを知らなかつた。

……キロキロキロキロ……コロコロコロコロ……
こんどは　こんな風に啼いてゐる、
おうお　伸びなければならない小さな魂よ
このまだ寒い夜なかに　勞はり愛しつつ、
ああこの二三日　筑波おろしの吹く
寒い日ばかり　つづいたので
氣まぐれから　麓の春らしい氣配(けはい)を忘れてゐた、
わたしは　たのしい雀躍を感ずるのだ。

夏の祭り

天下泰平
村内安全
五穀豐熟
八坂神社

この輕いユウモアと悲慘とが手をつないで
何等の生活の　リズムもないことを
氏子總代は　萬燈(まんどう)に大書する。

そして太鼓を打ち鳴らし　神酒に醉つて

この萬燈に粗野な裝飾をつくり、
村から村へ　かつぎめぐる、
これは農民の生命(いのち)を大地に祝ふ　深い情景である。

つらなる山山は　ねむるころ、
にぎやかな祭りは初まる、
御神酒に醉ひ　野天に躍り
すこしも加工されてゐない　青春の惱しさのひびきがある

野天の氷店
青い平原から運んだ西瓜、甜瓜(まくわ)の露店、
あとは　なにもない、

村の娘たちが着飾つて
祠(ほこら)のまへに群れてはかへるころ、
そこに子供の時より見た
古代な情慾を思ひだすのである。

一年いちどの祇園祭禮！
天の川は　しらじらと久遠に
大空にながれて　果しなく
つくばのふもとのほとり
わたしの友は　萬燈に灯りをつけて
御輿(みこし)をかつぎめぐり
太鼓を打ち鳴らし、

夜つぴて　古風な祭りのなかにある。

村の雨乞ひ

太鼓の音のする方へ行かうよ、
村から村へと夜空に響きわたる
村人の祈りの雨だんぼよ、
鬱憂にふるへる夜である、
眞夏の炎天に田や畑の作物は　ちりぢり照らされてゐる、
村人は太鼓をうちならしながら　鎭守の境内をめぐる、
……雨だんぼ祝ひよ……
ほそぼそい農民の聲を聞いた。

すいすい　青い平原を螢は縫ふやうに飛ぶ
夜水引きの村人は眞夏の夜を徹して　田に水を引く
ああ　旱魃の日に待遠しい雨よ、
農民は地主と小作人、
ああ　夜空にゆらぐ　白星に夜の祈りをささげるのです。

山の風景

是從右左　つくば道　うらやま道

このわかれるところ
つくば山は深くなるばかり、
山百合は匂はしく咲き燃え
夏の森林は綠り濃く茂り、
このほとり男女川（みなのがは）は清くながれるよ、
水は谷間を　けわしくながれ、
川邊の巖岩は太古のかたちのまま
流れを揉（も）みくだいてゐる、

……この激流の水だからお茶の味はいい……と
言葉を持つ水車の主人は
わたしの村の人である。

鶯は鳴き囀づり、
松蟬の鳴きごゑにも
健康に生き　自然にめぐまれてゐるが
ガタガタトン、ガタガタトンと水車小屋の響きは古い。

曠野の花

野薔薇の匂ひを　どこから君の書齋に持つて來たか、
わたしは微笑して　曠野からといふであらう、
村の盆の太鼓が聞える
空は　よく晴れた、
村の乙女は　お化粧する、
取つておきの美しい姿は、
曠野の美しい薔薇の花だ。

わたしの書齋を曠野の花で　さびしくするのだ、

さびしい花は　戀の花だ、
一晩ぢゆう書齋に匂つた、
永遠のさびしい戀を唄ふやうに　曠野の花が匂つたのだ。

純情の花に寄する詩

野邊に　ほのかに咲ける白百合よ
ああ　處女(をとめ)なる心に似て　純情に咲けるよ、
其處は　筑波ふもとの田舍なれば
さみしげに美しく咲き匂ふ野邊よ。

つくばねは　永遠に神祕にねむり
麓にひろがる平原も　太陽のかくれたる夕ぐれのなかに
しづかなる夜を讃へつつねむれるよ
ああ　わたしの心も平原のほとりにねむれるよ。

麓なる野邊の白百合よ、
夏の夜をやすらかにねむれるよ
純情なる處女(をとめ)の心にふさはしく、
夏の夜を永遠にねむれるよ。

月小曲

月は山にのぼつた
山は　なつかしいふるさとの山だ
月は　なつかしいが大空をゆく旅のものだ。
ふるさとの山見れば　ありがたき心湧き
月見れば旅人のやうな　さびしい心が湧く。
だが　月よ
いつもふるさとの山の上に　なくてはならぬものだ。

杜　鵑

杜鵑が　泣いてゐる、
ホウヨ　ホウヨ　ホウヨ　この哀音は何處から流れるか、
月の出てゐる野邊よ。

少年の日聞えたことに杜鵑は一生自ら巣をかけないで
山鶯の巣に卵を産み雛に孵へすのだといふ……
巣立ちしてから杜鵑は　ホウヨ　ホウヨ　と夜に泣く、
そして　世に苦しむといふ
親知らず　子知らずの氣儘鳥。

なぜか　この俚話を忘れない、
少年の日が　想ひ出されるよ、
ホウヨ　ホウヨ　と泣く　それはほんとうなのか杜鵑よ。

魚釣り

村童の日の魚釣りを忘れてゐた、
鮒の餌は　蚯蚓だつたのだ、
沼は灰色に濁つてゐて
岸邊の竹藪に夕暮れが來た、
鮒は暗黒な沼に　ぢつと眠りに沈んだ、
沼の水は　ぬるい。

夜な夜な　五位鷺が來て、
鮒の眠りから搖り覺すんだつて、

岸の杭に　白い糞がついてゐる、
この暮春に　わたしは沼と別れよう。

氏神様

森は新緑に芽吹いた、
樫の樹の亭々として美事さ
氏神は　上位におはし
裾に立てられた武人の碑を愛撫し
久遠に森は伐られないであらう。

樹木の鬱蒼は森の中を暗黑し
藪蚊が棲息するといふ、
樫の幹には　物怪(もののけ)の洞(ほら)があつて

子供の怖氣を增すといふ
幼い者への哀憐よ。

銀杏

菩提所に天を摩す大きな銀杏、
秋の日　實が　地面にこぼれた
兄は　落實(おちみ)の一つを持つて歸つた、
尋常二年の時　種を蒔いた銀杏だつたと、
今　庭の隅に丈餘の樹幹を伸ばした
銀杏の葉は光りを浴びて美しい。

野犬に咬まれた土鳩(とはと)の屍骸を
銀杏の下に　埋めたといふ

幼き日　兄の佛心を想ひ出した。

麓の娘

野の女の唄よ、
……筑波山さへ　男體　女體
　誰がつけたか　男女川……
おお　平原に生きるものの自然の唄よ、

野に草を刈る　女の唄に麓の日は暮れる、
あとには蜩がなくばかり、
おお　平原に日は暮れるよ、
わたしは　さわやかな夜の平原をあるくのです。

盂蘭盆

丘には　まんまろい月が浮んでゐた、
野なかには　ホウ　ホウ　と水鶏が鳴いてゐた、
村の墓に線香は蒸される、
野道を　ちらちら歩く　迎への提灯！
ああ　亡き人の家郷にかへるといふ　うら盆の夕よ。

草地の墓には夜つぴて　蟋蟀は泣く、
月は空にのぼつた
追憶の花の咲く夜だ。

七夕祭

村の家の庭に立てられる、
青い竹の枝枝にむすばれた　きれいなかずかずの短冊よ、
おうお　うるはしき傳説の七夕祭りよ。

陽のあがらむとするひととき　脈うつ連峯のしづけさ、
平原は美しき夜の眠りから覺め
村の朝は　さわやかに　ああ　心は祈りにある。

おうお　空の星よ　天の河よ

ああ　哀戀の黎明(あけ)にある　麓の村の七夕祭り。

古墳のほとり

ふるさとの山へ上らうよ
いくつもの丘　いくつもの森林
そこにある古い墓よ、
古英雄は故郷の山に永遠に　ねむれるよ。

ああ　丘の墓よ、
古英雄の碑よ、
耕人は墓地を拓き
いまは　ひろびろしい山の耕作地に

青い陸稲が　いちめんに　秋の收穫を
村の農夫に　ささげてをる。

秋

どんより低く地上に垂れさがつた
灰色の怪しい雲よ　飛べ
おうお　あらしの跡よ
夕陽は地上に輝く
宇宙に雲は異様に分裂する、
黄　紫　紅　白
強い　尊い　光線の反映をうけて
雲の色彩は夢のやうに美しい
おうお　秋だね

百舌鳥

朝だ
あ、ら、しのやんだ朝だ
何といふ朝の靜かだ
冷氣だ
疲れた心臓は大地に游泳する
おうお　秋の物體からの警告よ
何處かで百舌鳥が　けたたましく啼いてゐる。

暴風雨

あらしは　さびしい
かれは狂暴なものを持つてゐる
偉大な惡魔だ
疲れた農村を吹き狂つてゐる
畑の桐は　へし折られ
黒早稲の美しい花は　たたき落され、
おうお　花園を見よ、
秋の季節に向つた美しい花の精は滅びる
葉は雨と泥に打たれ

花は風にもぎられる
おうお　自然よ。

蟋　蟀

こゝろぎは　泣いてゐる……
キロキロ　キロキロキロ
これは室の隅から發する音響である。

この小さな響き……
今晩は　はたと止んだ、
響きは彼等の生活である、
詩人が詩を吟ずるやうに
彼等は生命を吟ずるのだ。

はて　今晩は何處へ行つたらう……
あきらかに　死といふことを豫感しながら
わたしの魂は夜の冷氣に　ふるへた。

松　蟲

無沙汰をした、
土を盛つた甕の中を覗くことを忘れてしまつた、
わたしの氣まぐれの心は
なんといふ罪ふかいのだつたか。

チンチロリン……チンチロリン……チロチン……
この蟲がいつの間にか飢渴に枯れ死んでゐる、
愛玩を倦むだ　わたしの寂しい忘却よ。

第二篇

死の春に寄する詩

なやましい述懐をつれて　ふらふら田圃をあるく、
烏は　ガア　と啼いて　麥畑から飛び上つたのです、
かれは　餌あさりをやめて
わたしの眺めてゐた鮮かな景色の上に不吉な聲を立てたのです。

おお　田舍の顏よ　麥畑に撒かれた肥料の匂ひさへ
なつかしい陽春の日に　樹木は一せいに芽を出してくる、
農夫の藁小屋に久しくすてられた　節外(せつはず)れの馬鈴薯にも、

青い芽をふき出した　健全な感じのする季節に
青春のいたいたしさを　少女の重ぐるしい胸に投げつけるよ。

ああ　この可憐な愛の播種者よ、
愛の芽生はさびしく枯れた、
故郷の山は明るい顔と　晴れやかな春の衣裳をつけて
嗚咽する死に
深い愛戀を起させるのだつたが、
ああ　地上の春に背くものよ、
暖かい春の日に、
わたしは一個の寂しい葬儀に列するのだ。

春の花に寄する詩

おうお　花賣りは路傍の茶屋に燒酎をあふつてゐる、
爛爛と咲き燃ゆる花よ　此處は村落、
暖い光りは遠く
花賣りの主は美しい少女でない
茶屋で旅の疲れを癒してゐる
四十男の勞働者だ。

世は寂しさ、
勞働者は花の生命を愛してゐる、

花作りが勞働者で
みすぼらしい印(しるし)はんてん着てゐても
かれは　見知らぬ村落をとほり
春の大地に　花の生命を愛してゐる、
……春が來た　地上にこんなに美しい草花が
芽を出し生命(いのち)を輝かした……花を一つ買はんせい……
農夫には貯へがない、
花賣りの停つた茶屋で野の歸るさこの野男も醉つてゐる。

おうお　この一日を終つた旅路よ、
町の場末から遠く車を曳いて來た花賣りと
この酒に醉つた野男、

おお　ともに險(けは)しい生活(くらし)の旅路(たび)よ、
花賣りの旅路に、
唄ひ女のごとく賣られる花花は
匂はしく咲いてゐる、
滿載された　花花よ、
ああ　わたしの胸は搏たれる、
春は來た……。

寒村

老いたる　ふるさとよ、
山の木は伐られる
時代の手に　山の石は斫られるよ
大地の匂ひを嗅ぐ　山のやつれよ。

このほとり野に聽く
ああいま　魂を還らしめよ、
よい娘は賣られてゆく……
美しさも枯れねばならないのだ。

春はまだか

ド　ド　ド　ド　……この山鳴り
地響きが　ひそんではしないか、
山が可愛さに　先祖が賣れなかつた山だ、
時代の手は　斧を　にぎる、
地を匂ふ山鼠の追放と
樹から枝に巣くつた　栗鼠は家を喪ひ
なんの童話も持たない
ど、ん、ぐ、り、山は伐つて炭に燒くといい。

あたらしい切株に腰を据ゑて展望する、
ああ眺望よ　この童心めいた感嘆は失せ
あの耕作地は誰のものか、
ふしぎはない　農村の顔である、
から、す、が　啞々　となく
山は雪
久しぶりで山へ來て　山の靈を見る、
麓の野面を見おろす、
春はまだか　くるなら來い、
そして　わたしの重ぐるしい外套をぬいでくれ。

崇　嚴

……お父さんは今によくなる……
……僕は　そんなに不運ではないだらう……
と自分を信じてゐた、
……仕方ない心で……
しかしそんなことあるまいとおもつて見た、
……三十五日の法要もすむだ、
今でも僕は　お父さんが過去の人だとは思はないのだ……
……おうお　お父さんは墓場だ！

この嘆息が僕にとつて何といふ
環境のかなしい支配だらう、

墓は　わたしの環境の上にある、
そしてただひとつの崇厳なのです。

光りばかり

わたしは荒廃した枯草を燃やす野火だ、
燃えろよ、
また　また　曠野に日は暮れるよ、
残るは　心の強い光りばかり。

野原は枯芝

おうお　野原は枯芝、
その上に　情熱を燃やそうか
燃えろ、
二人の顔を赤くほてらすまで……
おうお　野天の幻想よ。

雑木林

うすら寒い日だ、
雑木林は　季節に枯れた
なんの奇もない　季節に枯れた。

遠き日　流浪の日
異郷に寒い　冬の來て
もみぢした　筑波ねを
心で眺めた　ふるさとの季節よ。

村落

おうお　ふるさとよ、
世相を見ないか
別離や　勞働や　放浪や　不安や
正月が來たといふのに
一枚の賀狀すら來ないといふ、
幼き日の村童を思ふのだ。

村相

村童の一人
吉(きち)は今何處にゐるのやら
流浪の勞働者になつたといふ
吉(きち)は幼年の日鳥打ちの名人だつたが、
八(はち)の墓碑は立つてゐる、
子供は伸びてゐる、
三郎よ、
三郎は小作百姓でもくもく働いてゐたが
自由勞働者の仲間に入つたといふのだ。

折に觸れては

野原に散歩しては
ともすると野原に泣いた少年の日に
あこがれを持ちながら古い記憶の姿に慕ひゆく、

折に觸れて、
ひよいひよいと飛び浮んで來る
わたしの少年の日
古い記憶のなつかしい姿よ。

村　童

ああ　遠き瞑想の日よ、
冬枯れは寂しくもある、
かなたの崇嚴な山の心
千古の冬の姿だ。

雜木林の葉は落ちる
小鳥は群れる
其處でわたしは少年らしい思索を持つた
村童の日を考へるのだ。

寒村風景

……急いで借りて來い……酒好きな親爺の言ひつけで
小娘は德利を破れた風呂敷に包んで
往還を馳けて近所の居酒屋へ行つたが
斷はられた
また　その隣りの店に戻つたが
德利には酒が滿たされなかつた、
……ああ　きつと何處でも貸してくれないのだなあ……
近所の人は　さびしい心で眺めてゐた。

小娘は家に戻つた、
その親は使ひにやつた娘を思ひながら
軒場で煙草の土葉を一枚一枚のしてゐた、
葉煙草は乾燥されてゐる。
晩秋の夕日はこの親子に　あかあかと照つてゐた。

嬰　兒

黑い旗を立よて前進せよ
あらゆる封建的な姿を
眞新しい苦闘によつて燃燒せしめよ、
幸福のために、
奴隷より生還せしめよ。

農土は　かれの肉體である、
種を播く肉體である、
かれは其處より生れた嬰兒である、

生みの親は農土である
嬰兒は苦闘によつて、
時代に燃燒して熄まないのだ。

燃　焼

農民は燃焼してゐる、
燃えて熄まない噴火口だ、
背後には火山灰が山積してゐる、
久遠な四季の循環に
生活を燃焼さしてゐる、
――去年のような不作ぢや浮ばれない――
彼の噴火口にはまたしても燃えたぎるであらう。
……今年はとれたが物が安い――

時に燃焼はさまざまである、
苦闘に燃えよと、
農民は何時も燃焼して熄まないのだ。

蟷螂

蟷螂は黄ばんだ稲の穂先きに止つて、
晴れわたつた秋の空に呼吸してゐる、
なんといふ微笑ましい感じだ……
かれはいま何を意識しゐるか、
靜思と飛躍の間にある、
その周圍から螽はピョン〳〵懸命に跳ねてゐる、
生存には一寸の隙間もないのだ。

蛙

田圃へかけ出したら
蛙が鳴いてゐる、哀れつぽく鳴いてゐる、
夕方なので草むらは薄暗い、
見たら蛇だ
しかと咬へられた蛙の生命のちぢまる苦悶だ。

ちらと頭に浮んだ、
この小さな二つの生物よ、
自然はどんなところもに闘爭を作つてゐる。

土　地

たとひ世は怪しい雲につつまれ
明日(あした)なしの暮らしになつたとて
土地は　かれに　向つて　寛容です。

土地から去つたとて昨日(きのふ)の土地にしるされた足跡は
永遠に明らかです。

土地に　かれが　いかなる日に
いかなる時代に　歸つたとて許容さるべきです。

土地を　あはれみ
土地へ　光りを　あたへるのが
行くべき正しい道です。

……永遠の瞬間に　かれは　いかに
眞理に　生きて　をつたかと　いふことをです。

第三篇

哀傷詩篇

家の屋根にとまつて
鳩が啼いてゐました
鳩は來たこともないのに
五つ六つ毎日のやうに何處からか
飛んで來て逃げようとしないのです、
　グググ……ググ
もしかしたらこの不吉の豫感が
父の死期をわたしに告げるのではあるまいか、
おうお　春　暖い日

田圃へ出ると菜の花は盛りだ、
……どうぞ死ないでください……
わたしの目に熱い涙がほろりほろりおつる。

父が死んだつて食つてゆけるよ、
……勿體ないことです……
母はわたしの顔を悲しげに眺めた、
世に何も用意のなかつたわたしは
放言に似た語調を強めたことが
何かしら寂しい感じがした、
……親讓りがあるから食つてゆける位にしか考へなかつた

自分の心を一日ぢゆう可哀相でならなかつた。

わたしは世に愚かもの、
せちからい農村で暮らすことが
どんなに苦しいか、
米も取らねばならないし、
そしてそれをいろいろなものに
計算しなければならない、
それは世に淺い子の勞苦である。

……私は懸命にやります……
わたしは叫むだ、
徴兵もすみこれからが私の働きが見えるのに
父は私を枕頭に置いて永遠に別れた、
……人生にさようなら――
悔や嘆きもさる事ながら、
死は人生にお禮を云つて御暇乞をする最後であり、
そして人生に對する一切の感謝である。

父の葬式を送つて私は氣がボウ――としてしまつた、
なぜ死を與へたか、

そして人々が集つて私に悔みを言つてくれたか、
涙に曇つた目で人々の言葉を受け、
讀經に私もたまらなくなつたが、
そのとき籠から鳩が空へ飛むで行つた、
春の大空の彼方へ、
そして私は俯向きながら
濡れた目で旗や花環を數へて見た、
――葬式の行列に私の魂はすすり泣く。

父の墓まゐりをする、
私は子供でなくてよかつたと思ふ、

——子供は死を理解できないからだ——
墓地はいいところだ、
人生に墓地がなかつたらどんなに寂しいだらう、
墓地に人間の紀念塔が、
立つてゐるから過去があり現實がある、
私が父の紀念塔を立てるとき、
それは詩でありたいのだ、
人生の詩であり
追福を祈る詩であるべきである。

そして私が疲れたとき

紀念塔に額づき
若し志を得たなら
紀念塔に額づき
何れにしても紀念塔に密接な關係を持つ、
親と子の人生問題である。

農村に生活する一つの幸福が産れた、
それは地上に生きてゐる私と
地下にある父と
近くにゐるので追憶がしきりに去來するからだ。
そのたびに私の身は緊きしまるのだ。

農村で勞働しようか、
私はその環境にある、
青い大地よ、
父は私に遺してくれたのです。

敬愛を感ずる私の師よ、
農村に怠惰な日を暮らさない、
健康に生きる大地の子である、
おお　思潮に乘つ切る私の師よ、

私はどんなに苦闘するか、
これは農村から永久に解除されない苦闘である。

阿見原の詩

註

阿見原ハ常陸平野ノ南方霞ヶ浦畔ニ位置シ近ク湖ノ注ゲ太平洋ニ東面シ東洋隨一ノ海軍飛行場ナリト云フ現今日本帝國ノ國防完備ノ重任ニ當ルトイフ、小生某日阿見原遊歴ノ日ニ此ノ長詩ヲ作レリ。

春は　とつくに　野に暮れてしまつたが
空は健康に晴れわたつて
太陽は　しんみり　輝いてゐました、

やわらかい空氣は宇宙　いつぱいで
新らしい道具立てをした　ただぴろい
平面は果てしなく　そして限りない立體で
空へ　のぼつてしまふと　ほんとに遠くて
言葉もかけられない立體です、
其處に　わたしは人類の波動と
科學の響きを耳にします、
無線電信は構圖が大きくて
何か敏感の革命家のように
大空の果てに先驅して言葉を持つてる
人の善い惡魔です、
戰禍を知らせやしないかと想つてると、

今日はアメリカから友達が飛んでくるんだといふ
じつに　なつかしい手紙を彼は受けてゐるんでず、
常に　風雨の時でも　晴れた日でも
彼は退屈そうな顔もせず　撫然と立つてゐるんです、
上は鐵骨と線で　からくりがあり
下は小屋で彼の内臓の機能は
じつに　よく働くのです。

飛行機も航空船も新しい格納庫に
貯藏してありますが　時々運動します
彼女は碧い湖に浮んで水鳥のようであつたり、
横臥したり　宇宙に呼吸したり

活動してをるのかとおもふと休息したりします、
このやさしい現代的な美裝をした　彼女は
時に　美しい彼女は爆彈さへ藏してをります
そして　愛嬌ふりまいたり　威嚇したりします、
彼女は近代科學と軍國政策から產れた
畸形兒で　二十世紀は生みの親です、
彼女の兄弟は　大空高く飛びます、
雲の上を　平氣で　翔けます、
町や　部落や　線路や　平野を鳥瞰し
關八州を君臨し
海洋の彼方に翼を休め
遠く飛んで千島の果て、

更に　遠く大西洋の港までも
彼女は　熱心に烱眼を開いて
あくまで　文明と愛國の使者です。

湖の岸にボートが澤山乘り捨てられてあり
砂利を埋めて固くなつた軍用道路には
水兵さんが　行つたり　來たり、
海軍自動車は勇敢に砂塵を捲いて疾驅し
原は　廣漠だが　青春の大地で
青年士官が技術を練り　思想を强健にし
兵舍の建物は青年士官の幻想に燃えてます。

昔は原は農民の所有だつたのです、
部落から部落へと寂しい野路が續き
麥生は　穗が出る。
菜の花は眞盛り、
其處に雲雀は野天の愉樂を唄ひ
農民は野にすだく蟲の音樂に季節を用意し
天候の惠みによつた食糧を耕作し、
訥朴な勞働あつて、
春は　土に種を播き、
夏は　畑の草を刈り、
秋の取入れに農村の生計を立て、

四季の循環(めぐり)に耕人は生れ　耕人は去り
原は　耕人の血と汗の勞苦によつて開墾されたのです。

夢を見失ふ日はやつて來ました。
耕人は土地と住居を失ふ日は來たのです、
農民は原を追はれ　鄉土を失つたのです、
原を去る農民は感情を高め
原に住みなれた彼等の祖先は
いかに　脅威を受けたであらう、
彼等には　祖先の墓地と
數百年の傳統の歴史がありました
おお　故鄉を追はるる農民よ、

農民の黎明の目覺めは何處にか、
時代の手は　善性である　魔性である、
失へる鄉土に新しい文化の誕生がある、
新開地の進展よ、
其處に街は開らけ　賣笑婦が彷徨し、
夏の風は　喫茶店に客を呼び、
交通は變遷し、
新聞記者は鉛筆で　明日の記事を書く、
湖水は　千古の神祕と現代文化の手品師である。

海洋よ　何處に戰禍があるか、
海洋よ　何處に平和があるか、

太平洋は目まぐるしい
理想と空想の一致である、
おうお　記錄さるべき航空船を
帝都に飛ばした技師は故國にかへつた、
强健な航空將校は海洋を知り、
めづらしい生命的な軍國詩人である。

五十年後の海洋は　あらゆる豫言者と
あらゆる學者と　あらゆる詩人によつて懸賞さるべきである。
つぎの時代の文化を作るために生誕する、
新しき嬰兒の批判である、
その時　民衆に階級闘爭を敎へた革命家は死んでゐる、

その時　民衆に先驅した詩人も死んでゐます、
白鳥省吾も死んでゐます、
航空將校も死ぬであらう、
その時　詩人福士が若き日の日本に述懷され
おうお詩人白鳥の一卷が本邦詩壇を代表し
海洋彼方の詩壇に祝祭され、
航空隊の愛國的な奇蹟は
國民の新しき發見によつて表彰されるであらう、
ああ時代の墓に草は伸び
されど時代は世世に、
民衆と共に永遠の疾驅者である。

耕人の詩

わたしは黎明の野原の寂しいみちを一人ゆくたび人、
いまにわたしの顔は
なつかしい時代の友達の顔顔と　ともに
憂鬱のむせび泣きから輝くであらう
わたしたちの世紀
それは今日でもかまはないが
わたしたちの時代に
わたしたちの詩がわたしたちの生活に
わたしたちの生命にはげしい刺戟をあたへ

わたしたちの勇躍が意のままなら
わたしたちは人人とともに
時代にいたづらな涙はしないだらう。

おお時代の耕人よ
わたしたちの背後には思想の變遷が
つめたい嘲笑をなげかけるとき
田舍のむし暑い夜には
植ゑられた青田や農夫の家や青い樹木の
いたるところにすみやかに稲妻する
遠い地平線の彼方では
作物の災害が豫期しない警報とともにやつてくる。

ああされど耕人よ
ほんとうの田舍はわたしたちになにを教へたか
田舍は時代の風潮に磨滅しない
意志を胸底ふかく藏しながら
ゆたかな微笑をうかべて
田舍の主義とせる奮闘と努力とのうへに
意義ある人生の建設をはかつたではないか
しかも强打者のごとく默として田園の本疊に立つ
傳統の把持者でなかつたか
ああほんとうの田舍がわれらに示すものは
すべて權利を享有して

義務から全くさけることではない
それから眞實の田舍は本當の體驗より成つた
わたしたちが何處まで高唱してやまない
心から涙のにじむやうな
我等農民の詩を寄與してをることである。

愛する都市放浪者よ
その憂鬱はどこからくる！
卿等の nostalgia は田園の愛の匂ひに吸り泣く
卿等の心臟は noStalgia に鼓動する
田舍の幼い日の記憶の一頁にひとり對坐して
しのびやかに泣くであらう。

愛する放浪者よ
わたしも黎明の野に馳せるまでは
おろかしい放浪者であつた、
そしてわたしは友と知り
共同戰線の塹壕のなかに武裝してあつた
お隣りの戰友は時代に飛躍しなければならない
精神で相手の牙城に突擊のまま斃れた
ある戰友は我等の戰線から別れて
相手の歩哨と路上で一騎打ちをした
なほ友は我等に白兵戰を豫告して
塹壕のなかから手榴彈を投げた

みな世の組織のうへで行はれた
すばらしい闘爭史である。

いま黎明の原野にさしかかつた
わたしは其處で一人の兵卒が鍬を振り上げてゐるのを見た、
わたしは訊ねた、
一體何をしなさるんです！
彼は堅い脣をほころばしながら語る……
わたしの主張に破産を來ましたから一層のこと
このやはらかい土を堀り起して種を新規に播くのです
と　言葉すくなく傷ましげに答へて
また　鍬を振り上げた

その言葉にわたしは飢ゑてゐた
そしてほんとうに寂しすぎた。

村落の舞臺

鐘や太鼓の八木節踊り
かの女らの熱しきつた　にほひが
觀衆の嗅覺を強烈に刺戟する
田舍の木賃ホテルの前
漂泊(さまよ)へる笛や太鼓の旅藝人
かの女らは踊る。

これはささやかな田舍の饗宴である
わがままなお化粧したての肉體いつぱい

淫蕩な情感のリズムを織りこむで
彼女等は　よく踊る。

かの女等は野天の廣大な舞臺面に
かくも放縱に
かくも狂奔に
得體の知れないすばらしい
田舍まはりの旅藝人が
田舍に無遠慮と喧騒とを
寄與してをる　たそがれである。

田舍の木賃ホテルの前

高いポプラの樹に蜩がないて
闇は次第に深まらうとするのに
周圍はしづまりかへらうとするのに
觀衆はこの異彩な田舍の饗宴に
調子　づいてゐる。
鄉愁にみたされた晩夏の
情熱と　いろと　かげとの反射のなかに
觀衆は　さわやかなするどい
視線と心臓とを　なげてをる。

田舍の風景

さびしいかぎりの鬱憂におののく共同墓地へと
ひとびとはなみだぐましいほど
簡素にこしらへた死棺をかついではしる
ひとびとはくらく重ぐるしい幻影をとり卷して
死棺の周圍にあつまり
秋晴れた歎きの丘へと
禮儀ただしい埋葬にいそぐ
夕暮れのつめたい寂寞と　ともに
死體を葬るのだ。

さびしい死者よ
じつにあはれな話だ
路傍の僕でさへもこのとほり弔らうよ
わたしはするどく吐息し
この夕ぐれに死者のことを考へる
ちいさい名もない墓よ
ああ　死よ

まづしいひとびとにのみ
禮遇をうけて小高い山の麓の
枯芝覆ふた平面の墓地へと

村路をとほり越して　しづかに行く
傷しい人人は冷かにみづからの涙をはらひのけて
音樂もないまづしい埋葬の行列がながれる。

田舍の風景はみんなさびしい
そして異様に　にぎやかにみえる
秋の夕ぐれの風のなかを
田舍らしい人生のでたらめと　しんけんとが
交錯し　嗚咽し　呪咀し
ながい人生の旅行をつづけてゆくのを
いま　わたしは路傍で見た。

亡き詩友を憶ふ

いま蒼穹は　おさない六月の雨
あたり一散に曇れる憂鬱の泪
ほとりに彷徨ふ靈魂の melancholia

蕭條と蒼穹に窒れる六月の雨
靈魂に降りそそぐ　ああ地上にひとり
かなしくうたひつ　さびしくおもひつ
若き熱情の日に祭壇を主張する友よ
祭壇の建設地は

嶮しい山の傾斜の線の上にしようか
意想の強烈　沈靜な意志　謙虚な思索に
自らを思慕せしめようか
或は聖なる男女の薫流のほとり
遠き曠野の細微な佳き起伏を
あかず　眺め
祭壇には
詩を獻げよう
思想も盛らう

こんなものを供物にしようぢやないか
火焔のごとく燃ゆる處女の柔き肉體

熱れる脣　platonic の粹純と
身體の赭くして強きもの
勇健なる青年の思索を供物にしよう

それから芳醇な日本酒の陶醉と
おいしいサラダ食む祭壇

祭壇の周圍には　テントを張らう
なるべく清楚な水色の冷たい羽二重にしよう
そして野に咲いたまづしい季節の花で
質素にテントを色彩らう。

靈魂はそのなかに蘇り千千にをどる
陽快の愉樂に甚だうたふ
されど　ああされど永い間今も暴風雨のなかに
曝れてあつたことを如何にわすれ得よう
六月の風雨　はかなし

愛する激濤の航海者よ
また　靜かな詩の國を漂泊(さすら)ふ若きものよ
潜める一切の感情は花のごとく燃え
永眠の髑髏は瞳孔みひらいた六月の日よ
されど六月の日は　ああ轗軻の悲哀を抱き
無名の路傍にある　いたましい過去帳の記錄よ

ああ　涙ぐめる蒼穹(おほぞら)より落つる六月の雨
靈魂に六月の雨はふる。

人生は何といふ苦鬪の襲來する
戰線に立つことだらう、
友は昨日の戰鬪に華華しく斃れた
今日も明日も戰ひは繁く
若き墓標にいのる祭壇だ
詩の十字軍に逝ける人の祭壇だ
祭壇のかたはらに嗚咽やむなき
弔魂のあの吹奏を聽くであらう
喇叭手はわれなのだ

ああこのさびしい喇叭手はわれなのだ。

「大地の展望」のために

筑波根の新詩人泉浩郎君が今度その第二詩集を刊行するに就いて郷黨の先進として自分も一言君のためによろこびの辭をさゝげよう。

茨城はすでに誇るべき郷土詩人として横瀨夜雨、長塚節の二大天才をわが文壇に送り出してゐる。しかもこの二人は揃へも揃つて名峯筑波の秀容を朝な夕なに眺めて育つた。わが泉君も實にこの紫の山の尾に生れ其處で人と成つたのである。その取材おのづから兩先輩に庶幾するものあるはまた當然である。君の詩の殆んどすべてが此の山に對する愛着の心をもつてつらぬかれてゐる。

しかして同時に君の詩の眞髓は田舍の人々に對する心からなる親しみと鄕土に對する從順な奉仕的精神をもつて終始してゐる。

われら幼くして生地を離れ、いまは都會の子として遠く舊山河を夢見るのみ。泉君の新詩集は忘れられた故鄕の顏を私の上に再現し、すが〳〵しい筑波根の思ひ出に荒んだこころをうるほしてくれるであらう。私は君がやがて夜雨、節兩氏の後を繼いで鄕土詩人の輝く名のもとに新興詩壇に異彩を放つ日を期して待たうと思ふ。

八月二十四日

多摩川畔、點魚村莊にて

多田不二

昭和三年十月十五日印刷
昭和三年十月二十日發行

定價金壹圓

大地の展望
詩集

著者　泉浩郎
發行者　白鳥省吾
印刷者　東京●巢鴨●千百六十四　皎明社　吉長邦司
發行所　東京府下高田町雜司ヶ谷大字龜原六十一　大地舍
發賣元　東京堂　東海堂　北隆館　大東館　上田屋